2024年7月総評　暮田真名

水仙になってもいいですか疲れた
松下誠一

音読するなら「水仙に / なってもいいですか / 疲れた」と５・ ９・ ４で読むだろう。まるで肥大した中七（九）に下五（四）が押し潰されるようなかっこうであり、「疲れた」を早口で読みくだすことになる。形式と内容のマッチングが優れていると感じた。

恋バナはいじめみたいで鳥兜
金光舞

誰が誰に恋愛感情を向けているか、というような話題は学校のような閉鎖的な空間ではたしかにいじめにつながりやすい。しかし「恋バナがいじめにつながりやすい」ということは「恋バナがいじめそのもののようである」ということとイコールではない。最後に置かれた猛毒の「鳥兜」が、このひしゃげた論理を昇華している。

星のなかホルン正しく組み立てる
藤ほたる

この句を読むまで、ホルンが組み立て式の楽器だということを知らなかった……星のなか（この場合は球体のリアルな星よりも漫画的な☆型を想像したい）でホルンを組み立てるというメルヘンチックな景を「ほし」と「ホルン」の「ほ」のリフレイン、どちらも金ぴかであることなどが無意識に支えており、無理な飛躍に見えないところに技術が光る。

口は父目は母に似て夏休み
まちりこ

夏休みに会った親戚の子どもの顔のパーツに遺伝が見られる、というのが穏当な読みかもしれないが、どうしても「夏休み」そのものの目や口を想像する読みへの誘惑を断ち切ることができない。夏休みの父とは、夏休みの母とはなんだろう。

明け方の海馬満ちれば
オレンジの水泳帽が

ゆっくり沈む
汐見りら

海馬とは記憶を司る脳の器官であり、タツノオトシゴに似たかたちをしていることからそう名付けられた。この歌は頭のなかで水泳帽が沈むという入れ子構造がおもしろいし、水泳帽が沈むプールとタツノオトシゴが水のイメージで結びつくところもおもしろい。言葉の連絡が緊密だ。

同僚にロボットがいる南風です
奥井健太

SF的な句だろうか、と考えて、いまガストで働いていたらあの猫のロボットが同僚ということになるのかもしれない、と思い直した。わたしが知らないだけで飲食店ではない場所でももう口ボットが働いているのかもしれないし、その数は今後増える一方だろう。たとえば50年後にこの句を読んだらどう感じるのか。

地肌揉むと地肌動くぞ夏の星
吉沢美香

まるで巨人が地球の表面を鷲掴みにして揺すっているかのようだ。もちろん、実際に動かされているのは作中主体の肌であり、夏の星とは地球のことではなく空に輝く星のことなのだろう。しかし、「じはだ」の「じ」は地面、そして地層の「地」であるということの視覚的な驚き、「動くぞ」という童話のキャラクターのような言い切りが、冒頭に述べたダイナミックな誤読へと誘ってくれる。

QRコード読めば完璧な家族
檜野美果子

博物館でQRコードを読み込むと、まるで本当に恐竜がいるかのような3Dが画面に表示される……というようなテクノロジーがある（拡張現実とか、ARマーカーとかいうらしい）。ここで使用されているのも同じものだと思う。完璧な家族というものが、だれが見ても幻であるとわかるかたちで浮かび上がる滑稽さ、寂しさ。

童顔で筋肉質よ七月は

絵巻

動物、剣、宝石、国……擬人化コンテンツは枚挙にいとまがないけれど、月の擬人化という発想に新味を感じた。童顔、筋肉質という二つの特徴は七月のもつややグロテスクなまでの生命力を伝えている。

帰りの会のつづいた世紀

牛田悠貴

「帰りの会」！　中学校からは「ホームルーム」という名前に変わるから、その名称がつかわれるのは主に小学校のあいだだろうか。帰りの会が終わらなければ帰れない。それが世紀レベルの長さで続くのは、端的に言って悪夢である。なにか神話的な響きのある句。